



人生百年時代？

- あなたは100歳まで生き残れますか -

痴呆介入研究グループ 稲垣 宏樹

Q. 「最近、百寿者という言葉を目にしますが」

A 「百寿者」とは、100歳以上の高齢者のことをさす言葉です。長らく沖縄の百寿者研究に携わってこられた鈴木信先生（現・沖縄国際大学教授）が、英語のセンテナリアン（centenarian=一世紀（100年）を生きた人）に該当する日本語として考案した言葉です。百寿者は、「百歳長寿者」を縮めたもので、99歳のお祝い「白寿」ともかけてあります。

Q. 「全国に100歳以上の人はどのくらいいるのですか」

A 百寿者の数は、毎年厚生労働省から9月の敬老の日にあわせて発表されています。平成14年度は、全国で17,934人の百寿者の方がいらっしゃいました。これは日本の人口から見ると、平均で約7,100人に1人の割合で百寿者の方がいる計算になります。この数字を意外と多いと感じる方もおられるでしょう。実際、百寿者人口は近年爆発的に増加しています。図1に示したのは、百寿者人口の推移です。初めて千人を突破したのは約20年前（1981年）ですが、

現在ではその約17倍もの人数になっています。この傾向は今後もしばらくは続くことが予想されています。

ちなみに、男女比ですが、女性の数が圧倒的に多く、平成14年度では男性の約5倍になっています。男性より女性が多いのは昔からの傾向なのですが、しばらく前まで男女比は、男性1に対して女性4という比率で、年を追うごとにだんだん男女の差が開いてきています。つくづく女性の強さを実感させられます。

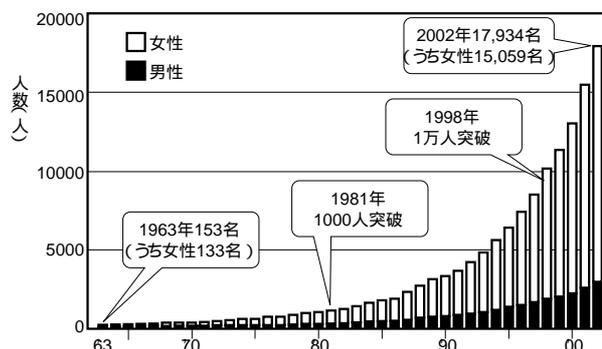
Q. 「現在、世界最高齢者は誰ですか」

A 長寿世界一は、鹿児島県の本郷かまとさんで現在115歳です。昨年3月、114歳のときに世界最高齢女性としてギネスブックに認定されました。かまとさんはマスコミにもたびたび取り上げられていますのでご存知の方も多いと思います。かまとさんは2日寝て2日起きという生活サイクルで、私たちの調査班がお伺いした時は残念なことに睡眠期間にあたってしまい、ご本人とお話しすることはできませんでした。男性の日本一は福岡県の中願寺雄吉さん、113歳です。中願寺さんは、かまとさんより2ヶ月早い昨年1月に112歳で世界最高齢男性として認定されています。現在、長寿の世界チャンピオンは、男女とも日本人が独占しているというわけです。

Q. 「誰でも100歳まで生きられるのでしょうか」

A 今のところみんながみんな100歳まで生きることができないことは確かです。実際にどのくらいの方が100歳まで生きられるのかを計算してみました。1900年に生まれた人142万人のうち、100年後の2000年（平成12年）まで生きた人、つまりちょうど100歳になった人は5,493人でした。割合としては、約260人に一人が100歳になった計算になります。百寿者の方が生まれた時代は今に比べて新生児の

図1 百寿者の推移



ちよっと Q&A 「人生百年時代？—あなたは100歳まで生き残れますか—」.....1

目次

長期プロジェクト

「老人性痴呆の総合的研究」のリーダー交代.....3

振り返れば.....5

研究基盤施設と研究情報室紹介.....6

福祉局長賞を受賞して.....7

「公開講座等の予定」.....8

死亡率が高かったことや、大きな戦争を経験していることを考えると、後の世代では100歳に到達できる確率ももっと高くなると思われます。平均寿命をみても、太平洋戦争直後50歳前後だったのが、今では男性で78歳、女性で84歳に達しており、2050年には男性で80.9歳、女性では89.2歳にまでなると予測されています。この数字だけを見ても、100歳まで生きるとはそう難しいことではなくなっているのかもしれない。

Q. 「100歳まで生きられる条件は何ですか」

A もともと長生きできる人とそうでない人がいるのではないかと考えられます。確かに、寿命の約25～30%は、その人が先天的に持っている素質＝遺伝素因によって決められていると考えられています。この例として、長寿家系の存在を挙げることができます。百寿者の家系に関する研究では、百寿者の両親や兄弟も長寿の方が多いと報告されています。このことから、親から子へ受け継がれる長寿遺伝子の存在が示唆されます。一昨年には、アメリカのハーバード大学の研究チームが、人の寿命に関連する遺伝子が4番染色体上にあるのではないかと報告しました。近年の遺伝子研究は、寿命や老化を規定する特定の遺伝子やその働きを明らかにしつつあります。

しかし、私たちの調査では、決して長寿の家系ではないのに、100歳まで生きていらっしゃる方が大勢見受けられます。このことは、環境の要因も重要であることを示しています。日本人の平均寿命は終戦をきっかけに劇的に伸び始めましたが、これは、戦後の社会や環境が変化したことによって、寿命の延長や百寿者人口の増加に強く影響したためと考えられます。こうした例をとっても、環境の重要性がお分かりになるかと思います。環境要因には、大きく分けて3つのものがあります。一つ目は、その時代や社会を生きた人全体に影響を及ぼすもの、例えば、医療技術の進歩、衛生状態・栄養状態の改善、戦争や地震などの災害といったものです。二つ目は、個人的な経験や生活環境で、食生活や飲酒・喫煙習慣、運動習慣、居住環境、経済状況、介護状況などがこれにあたります。三つ目は、偶発的な出来事、例えば、突発的な病気やケガ、事故などです。しかし、寿命と環境要因の関係はまだはっきりとわかっていません。多くの要因が複雑に絡み合いながら、寿命に影響を及ぼしているため、その関係がわかりづらいのです。

多くの環境要因については要因間の関連と寿命に対する影響をまだまだ整理していく必要がありますが、長生きをするための方法を探る足がかりになることは確かです。二つ目に挙げた個人の生活環境は意図的に改善することで長寿に近づくことができる可能性があります。よく取り上げられるものに食生活があります。例を挙げますと、腹八分目の食事（カロリー制限）が寿命を延ばすということが動物実験で確かめられています。カロリー制限が人間でも効果があるのかはまだ確認されていませんが、アメリカで自分自身を被験者としてこの方法を試みている方が実際にいます。その結果は、この方が果たして何歳まで生きることができるのかにかかっています。

Q. 「100年も生きるとみんな痴呆になってしまったり、寝たきりになってしまったりするのでしょうか」

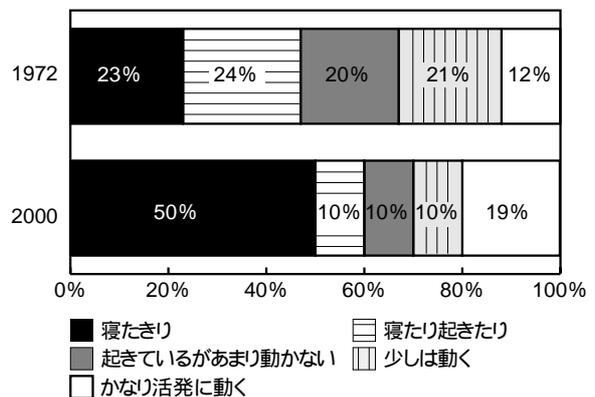
A 痴呆の有病率は、一般に年齢が上がるごとに上昇することが報告されています。1985年の厚生省の報告では、痴呆の有病率は65歳以上人口全体で6.8%ですが、85歳以上の女性では30%近くに達するという結果が示されています。

また、アルツハイマー型痴呆の有病率を調査した研究では、65歳以上全体では2～3%ですが、95歳以上では50%を超えることが報告されています。百寿者に関しては、当研究所が1972年に行った調査では91.3%、1987～89年の調査では62.9%の方が痴呆であったと報告されています。また2000年から行っている調査では、痴呆の簡易評価尺度（MMSE）を用いた推計で、78.1%が痴呆の疑いがあるという結果でした。いずれも、より若い高齢者に比べ痴呆の有病率は高い値を示しています。

寝たきりの方はどうでしょう。寝たきりの率も年齢が上がるとともに高くなっていきます。平成12年に東京都の一般高齢者を対象とした調査では、寝たきりまたは寝たきりに近い高齢者は、65～74歳で2.3%、75～84歳で9.6%、85歳以上では23.9%となっています。百寿者では、1972年の調査で22.6%、1987～89年の調査では31.2%と報告されています。やはり百寿者では寝たきりの率も高くなっています。

百寿者の寝たきり率について、1972年の調査と、我々が2000年に行った調査の結果を比較してみました（図2）。我々の調査では、寝たきりの状態を直接聞く項目を設定していないので、日常生活における活動度（ADL）についての質問から寝たきりの人数を推定しました。その結果、寝たきりに分類されたのは50.5%で、1972年に比べ割合が高いことが示されました。これは、医療技術の進歩の影響が大きいと思うのですが、現代では健康状態が悪くなった人でも100歳まで生き残ることが可能になってきていることを示しています。しかし、その一方で、1972年の調査では日常生活において自立している百寿者が12.2%だったのに比べて、2000年の調査では19.3%と、「元気な」百寿者の数もまた増えています。100歳になったからといって必ず呆ける、寝たきりになるということはないのです。

図2 百寿者の寝たきり率の割合(1972年調査との比較)



Q. 「今後、誰もが健康に100歳を迎えられるようになるのでしょうか。」

A これまで人類で最も長生きしたのはフランス人女性のジャンヌ・カルマンさんです。彼女は、1997年に122歳で亡くなっていますが、115歳を超えてなお若いころの記憶もしっかりし、ユーモアのセンスも抜群だったそうです。カルマンさんの例は、年齢によらず元気に長生きする余地がまだまだあることを示しています。元気な百寿者が元気でいられる要因を探ることが、我々に心身ともに健康で長生きするための方法を教えてくれるはずです。百寿者研究の重要性はまさにこの点にあり、将来その意義はますます高まることでしょう。

長期プロジェクト「老人性痴呆の総合的研究」のリーダー交代

本プロジェクトは老人研の表看板の一つで、これまで国内外から高い評価を受けてきています。平成14年10月、これまで本プロジェクトを引っ張ってこられた安藤進副所長から本間昭参事研究員へプロジェクトリーダーの交代がありました。これを機に、「老人研情報」編集委員会では本プロジェクトの「これまでのまとめ」と「これからの抱負」をお二人にお願いしました。

長期痴呆プロジェクトの中間点のまとめができた

副所長 安藤 進

.....

長期プロジェクト「老人性痴呆の総合的研究」は第一期（1989-1998）に続いて第二期の4年目を走っているところです。第一期の成果を受けて、第二期（1999-2008）の初めに3つの達成レベルを設定しました。「痴呆病態成立の解明」、「痴呆の早期診断」、「痴呆の発症遅延」の3段階です（図参照）。当時、国内外の痴呆の研究がアルツハイマー病の原因究明に集中していたなかで、当プロジェクトでは痴呆発症遅延をもっと先の目標として掲げることにしました。その目標の下、基礎研究ではアルツハイマーにかかわらず機能低下した脳活動を高める方法を追究しています。一方、臨床研究では健常者に痴呆が起こる前後の変化をフォローアップ研究で捉えることによって、脳になにが起こって痴呆になるのかを解明しようとしています。さらに、高齢者の行動への介入で痴呆発症を遅らせるプログラムの検証をしようという、これまでにない画期的な計画に



長谷川成人先生（精神研）



森島真帆先生（東大）



西道隆臣先生（理研）



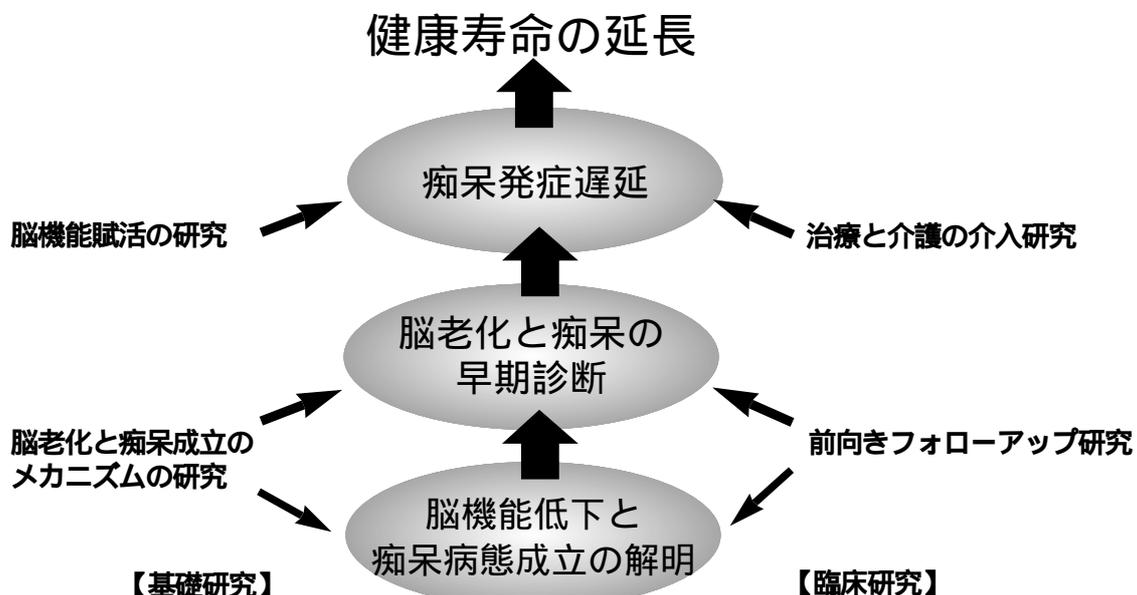
澤田誠先生（藤田保健衛生大）



岡野栄之先生（慶應大）

なっています。本年度、これまでの研究成果をまとめて、学術的シンポジウム（11月22日）と一般向け公開講座（12月9日）を開催することができました。

シンポジウム「痴呆研究の進歩」（オーガナイザー：白澤卓二）では基礎研究の成果を議論するために、国際的に



活躍している所外の研究者を招いて、2部構成で行いました。第1部の「痴呆の分子生物学」では、村山繁雄が痴呆脳の病理について、清水孝彦がAbの凝集活性について報告したのに対して、長谷川成人（都精神研）から痴呆脳の蛋白凝集体の、森島真帆（東大大学院医学研究科・神経病理）からAb産生の、西道隆臣（理研・脳科学総合研究センター）からAb分解酵素ネプリライシンの講演をいただきました。本プロジェクト第1期の立ち上げに貢献された井原康夫研究室の研究員であった森島先生、長谷川先生、それに森啓先生（大阪市立大医・老年研究部門）に馳せ参じていただいたのは嬉しいことでした。第2部の「痴呆の診断・治療へのアプローチ」では、石井賢二が痴呆脳の早期画像診断について、遠藤玉夫が痴呆脳における糖蛋白質異常について、安藤進が痴呆モデルの脳機能改善について発表しました。所外からは、澤田誠（藤田保健衛生大・総合医科学研）からミクログリアによる脳機能改善について、岡野栄之（慶応大医・生理）から脳の再生医療について講演をいただきました。特に岡野先生のお話からは脳再生への光が間近に見えてくるような予感をいだかされました。

公開講座は「痴ほうを地域で支えるために：早期発見、対応、そして予防」（オーガナイザー：プロジェクトリーダー・本間昭）の標題で行われました。高橋龍太郎は「痴呆の早期発見と対応：家族はどうしたらよいのか」、小山剛（長岡市高齢者総合ケアセンターこぶし園園長）は「痴呆ケアを地域で共有するために」、矢富直美は「痴呆はどこまで防げるか：地域の役割」のタイトルでそれぞれ講演をしていただきました。その後本間先生の司会で40分にわたり質疑応答が行われました。今回の公開講座のキーワードは「地域」であって、痴呆に関する知識の普及・啓発と活動支援が重要であると本間先生はまとめられました。この日はあいにくと東京は“ひどい雪”で交通機関が乱れてさんざんでしたが、小山剛氏が「こんな雪は長岡では大したことではない。痴呆の認識もたいしたものではないというようになれば世の中変わります」と言われたことは、今回の主題をいみじくも言い当てられたように思いました。

今回のシンポジウムと公開講座の開催において、本プロジェクトで目指す3つの達成レベルを順調に登ってきていることを示すことができたものと喜んでます。今後、本間昭プロジェクトリーダーの指導の下に新しい成果の生み出されることを期待しています。

これからの抱負

痴呆介入研究グループリーダー

本間 昭

昨年未だに、長期プロジェクト「老人性痴呆に関する総合的研究」のリーダーを安藤進副所長から交代した痴呆介入研究グループの本間昭です。よろしくお願い致します。1989年に当時の東京都養育院は痴呆制圧10カ年計画として「老人性痴呆に関する総合的研究」を東京都老人総合研究所の10カ年長期プロジェクト研究として始めました。その成果について、様々なご意見やご批判をいただきましたが、それらを踏まえて1999年に第2期の長期プロジェクト研究が開始されました。第1期と比べ、第2期では痴呆、特にアルツハイマー型痴呆の発症を少しでも遅らせ、高齢者のQOLの向上と同時に福祉医療行政に貢献するという明確な目標を掲げています。2000年から介護保険制度が導入されましたが、介護保険サービスを利用している人たちの半数以上には痴呆があるという報告もあります。この結果、従来よりも痴呆に対する認識が高まりました。そして、痴呆の発症を少しでも遅らせことなどを含みいわゆる介護予防活動が全国各地で始められつつあります。

平成15年度からは東京都福祉局も東京都全域で介護予防活動を始めます。このような社会状況の考えると、現在進めている「老人性痴呆に関する総合的研究」の意義は極めて高いといえます。

昨年12月に東京都老人総合研究所創立30周年記念事業の1つとして本長期プロジェクト研究報告会「痴ほうを地域で支えるために：早期発見、対応、そして予防」と題し都民を対象とした公開講座を開催致しました。当日はあいにくの大雪でしたが、にもかかわらず800人以上の参加者で埋まりました。いかに痴呆に対する関心が高いかを改めて認識することができた公開講座でした。

今後、本長期プロジェクトの特徴にあげた目的が達成できるかどうかは、それぞれの研究を分担している研究者が、それぞれの研究の重要性和意義を明確に認識できるかにかかっています。都民だけではなくすべての高齢者の生活に役立つ成果が得られるであろうと確信しています。今後とも、本長期プロジェクトに対して、ご理解とご鞭撻をお願い申し上げます。



小山剛先生
(長岡市高齢者総合ケアセンターこぶし園)

振り返れば.....

鹿児島大学医学部附属病院薬剤部 武田 泰生
(前 細胞認識研究グループリーダー)

細胞認識研究グループに所属しておりました武田です。この度、平成14年12月31日をもって老人研を退職し、鹿児島大学医学部附属病院薬剤部に赴任いたしました。老人研在職中は色々とお世話になり、たいへんありがとうございました。97年4月に、旧実験生物学部門に主任研究員として着任して以来、これまでの5年9ヶ月を振り返りますと、様々な思い出が去来いたします。

老人研に採用していただく前、慶應義塾大学医学部生理学教室に在職した時代ですが、わたくしは、神経細胞に発現し細胞相互間の認識や接着に関与する神経接着分子について研究を進めてきました。その中でも、免疫グロブリンと同じドメイン構造を持つ、いわゆる免疫グロブリンスーパーファミリーに属する膜貫通型の分子L1を中心に、脳神経回路網や神経突起を取り巻く髄鞘の形成における神経接着分子群の機能について研究を展開してきました。その頃、当時の実験生物学部門の室長であった渡邊先生は、L1ファミリー分子群と相互作用する、GPI-アンカー型(分子のC末端部分でイノシトールリン脂質を介して細胞膜表面に結合する分子)神経接着分子コンタクチングループに焦点を当て、新たに2つの分子NB-2とNB-3を単離しておられました。これが渡邊先生との接点であり、老人研で採用していただくきっかけになったのだと思います。わたくしが着任した当時の老人研は人事が一時的に凍結された時で、わたくしを採用していただくために、渡邊先生や老人研人事の方々が都庁に対して何度も交渉してくださいました。それからの5年間、老人研が様々な変革を迎えた時代でしたが、わたくしの研究人生の中で最も激動の、そして最も充実した5年ではなかったかと思えます。

当部門に所属して最初に手掛けた研究は、遺伝子欠損マウス(ある特定の遺伝子に改変を加え、その遺伝子にコードされている蛋白質の発現をなくしたマウス)の作製という、わたくしにとって未知の研究テーマでした。東京大学医化学研究所の岩倉先生はじめ研究室の多くの方々に色々とお教えいただきながら、まず一つ目の遺伝子(NB-3)欠損マウスの作製を行いました。3ヶ月間医科研に通う毎日でしたが、要領を得ないこともあって、そのうちの1月間はほとんど泊まり込みでした。真夜中に、ピペットマン片手に医科研の若い皆さんと共にわいわいがやがや実験に没頭した日々は、わたくしにとってたいへんかけがえのない経験となりました。皆さんに多大なご迷惑をかけながらも、やっとの思いで陽性クローンが選別できた、その時の老人研三人組(当時の出稼ぎ組は、研究生の李、赤阪、そしてわたくしでした)の歡喜ぶりを今でもはっきり覚えています。その翌年にはもう一つの遺伝子(NB-2)欠損マウスの作製に成功しました。

これら2種類の遺伝子欠損マウスに関する研究は、体型や行動など表面上の目立った異常も認められず、また脳神経核の形成や層構造の構築においても大きな異常が認められないという、極めて苦しい展開でした。この遺伝子欠損

マウスの作製に際し、標的となる遺伝子(NB-3およびNB-2)の発現を簡便に視覚化する目的で、NB-3欠損マウスにはNB-3の代わりにLac Z遺伝子を、一方、NB-2欠損マウスにはNB-2の代わりにtau-Lac Z遺伝子を、各々、発現するように遺伝子改変を施しました。そして、これらのリポーター遺伝子が発現する神経核群を調べ、そこから機能を推測した結果、NB-3は運動機能系およびフェロモン嗅覚系、またNB-2は聴覚機能系の各神経核群に、かなり限局した発現を示すことがわかりました。これらの発現パターンを指標にした行動解析を行った結果、NB-3がバランス-運動協調機能系に、一方、NB-2は中枢性聴覚経路の成熟および機能の発現に、各々、関わっていることが明らかになりました。ここまで展開できたのは、渡邊先生のお力添えはもちろんですが、研究に対する不屈のチャレンジ精神と実験を終えた後さらにエンターテイナーに変身し喉を唸らせるという、満ち溢れたバイタリティーを持った歴代の研究生諸姉に支えられたおかげだと思っています。

4年余りの歳月をかけここまで進めてきた研究でしたが、グループ制への移行に伴う老化研究への新たな方向性として、「Lipid raftの解析から高次脳機能のメカニズムを解明する」という研究に挑戦することにしました。この新たな研究の展開に際し、三名の研究助手、二名の非常勤研究員ならびに二名の研究生の方々に参画いただきました。Lipid raftとは、細胞の二重リン脂質膜に存在するコレステロールに富む領域で、最近、シグナル伝達に関わる多くの機能分子がここに会合し細胞内に情報を伝える場所であると示唆されています。これまで研究を進めてきたGPI-アンカー型分子もこのlipid raftに集中して存在しています。脳には数千億という神経細胞があり、それらが緻密な回路網を形成して記憶や学習といった高次脳機能を営んでいます。神経細胞間の情報伝達は細胞間隙に存在するシナプスという部位で行われますが、高齢化に伴う脳機能低下の原因の一つに、このシナプスでのシグナル伝達効率の低下があげられています。このような研究経過を背景に、この一年間、シナプス部位、特に、シグナルを受け取る側の神経細胞に存在する後シナプス肥厚部(post-synaptic density, PSD)に焦点を当て、PSD lipid raftを介するシグナル伝達機構の解明に向けた研究を進めてきました。

大学を卒業後、大学院へ進み、脳研究の世界へと飛び込んできました。大学院修了後、ワシントン大学への留学、慶應義塾大学医学部の時代、そしてこの老人研という各々異なった四つの機関を通して、教育/研究の楽しさと厳しさを学びました。この度、不意に老人研を去ることになりましたが、鹿児島という東京から遠く離れた地で、また病院薬剤部という新たな環境で、これまで経験のなかった臨床医/薬学を学びながら、研究の新たな方向性を見い出していきたいと思います。共に失敗に泣き、共に成功に歡喜した、これまで苦楽を共にしてきた多くの方々に心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

研究基盤施設と研究情報室紹介

実験動物施設

施設長：安藤進（副所長）、メンバー：倉本和直、幸嶋和子、藤野健、【非常勤職員】朱宮正剛

実験動物施設は、研究所5階の施設（SPF*動物実験区と老化動物育成区）と別棟の老化モデル動物開発施設より成ります。前者はマウス・ラット専用施設です。前者のうちのSPF動物実験区はオープンシステムで、研究者がSPF基準を守った上で、自由に動物実験を行っています。また老化動物育成区はバリアシステム下でSPFの老化マウス・ラットを育成しています。ここで育成された老化マウス・ラットは定期的にSPF動物実験区に移動し、実験に用いられます。後者の老化モデル動物開発施設では、多種の遺伝子組換えマウスが繁殖飼育され、この他では、疾患モデルラット、ウサギ、ネコなどが飼育されています。3名の施設職員はこれらの施設を分担して管理しています。また動物実験支援を目的として研究活動も行っています。実験動物飼育管理と空調管理は業務委託により行っています。

*Specific Pathogen Free（感染症に罹っていない）

アイソトープ施設

施設長：鈴木捷三、メンバー：金子孝夫、近藤 昊、松本茂信、本田修二、新海 正、三浦ゆり、田原正一（以上老化レドックス制御研究グループ）、中野俊一郎（老年病ゲノム研究グループ）

ラジオアイソトープ（RI）および使用者に関する安全管理を日常的業務として行っています。2001年度の主な活動を以下に列挙します。

- 1) 法令改正に伴い2001年4月1日付で新「放射線障害予防規定」が施行され、問診票が配布された。
- 2) 4月27日には文部科学省による立入検査があった。標識、注意事項の掲示、健康診断における問診の実施などが指摘され、焼却炉を改善するように指導され、それぞれに対して対応がとられた。また、2002年1月17日付けをもってP-33の使用が許可された。本申請にあたり、焼却炉に温度センサーが取り付けられ排気管との直結工事が行われた。

3) 2000年度の放射性同位元素使用登録者数は98名（研究所96名、老人医療センター2名）であった。

4) 放射線障害の防止に関する法律に基づく放射線業務従事者の教育訓練は2002年3月18日に行われ、出席者は81名（研究所79名、老人医療センター2名）であった。

5) 放射線業務従事者に対する健康診断は2001年6月21日および12月21日に行われた。健康診断およびフィルムバッジの検査からは放射線業務従事者の放射線被曝は認められなかった。

6) RI施設点検は2001年8月3日および2002年2月1日に行われ、異常は無かった。管理区域排気フィルターの交換は2001年9月15日に、放射性排水処理槽の点検清掃は2001年8月4日および2002年2月2日に行われ、管理区域の清掃は2001年8月16日および2002年2月21日に行われた。

7) 放射性廃棄物は2002年2月16日に日本アイソトープ協会に引き渡された。

8) 日常のRI・機器・施設の管理

ポジトロン医学研究施設・附属診療所

施設長：安藤進（副所長）、メンバー：石渡喜一、木村裕一、佐々木徹、織田圭一、診療所医師：石井賢二、兼務医師：三谷和子（東京都老人医療センター、神経内科）、テクニカル・スタッフ：安藤美代子、河村和紀（住重加速器サービス）、事務：金澤敏子

本施設は、ポジトロン放出断層撮影法（Positron Emission Tomographyの頭文字をとってPETと省略）を用いて老化と老人病の研究を進め、かつ患者のために先進的な臨床診断法を提供するために、平成2年に開設されました。PETは、放射性薬剤の分布を体外から特殊なカメラで撮影することにより、様々な生体機能を画像として評価することができます。PETの領域は、放射性薬剤の製造から臨床PETデータの収集とその定量的解析、またインビトロやモデル動物等までを含む幅広い学際研究です。それぞれの専門スタッフが、サイクロトロン・薬剤合成装置、PETカメラや解析コンピュータシステ

ムの維持から放射線取扱施設管理までの業務を遂行しながら、所内外と連携したグループ研究や長期プロジェクト研究にあたっています。附属診療所では25種類の薬剤が使用でき、研究成果に基づく先進的PET診断（一部保険診療）が行われ、東京都老人医療センターを初めとする都立病院や、その他の多くの医療機関を通して、研究の成果が社会に直接的に還元されています。主な活動を列挙します。

- 1) 生体、特に脳機能の循環、代謝、神経受容体等に基づくPET解析
- 2) PET計測法、画像解析法や定量的解析法の開発
- 3) 動物専用PETカメラによるモデル実験動物の機能解析
- 4) 放射性医薬品の開発と基礎科学への応用



東京都老人総合研究所 公式ホームページ
【ホームページアドレス】
http://www.tmig.or.jp/J_TMIG/J_index.html

■ 研究情報室

メンバー：室長：安藤進（副所長） 柴崎公子、森澤拓、佐藤裕子【非常勤】藤田喜弘（写真室）

研究情報室は、所内研究活動の情報環境をサポートし、情報の収集・発信・共有を効率的に行い、研究成果の一層の普及・還元をはかることを目的としています。その目的を達成するために情報科学に関する調査・研究も行っています。

研究活動において、コンピューターの利用は一層高度化しており、ネットワークセキュリティの確保に努めつつ、最新の情報環境の整備を進めています。平成13年度に所内ネットワーク機器、インターネットサーバの更新を行い、Giga Ethernet環境、ハッキング等監視環境、バックアップサーバ環境を整えました。平成14年度にはWebサーバ環境を再構築するとともに、東京都老人総合研究所ホームページのリニューアルを行いました。ホームページの検索機能を強化するとともに、動画、マルチメディア機能を強化し、わかりやすく、親しみやすい公式ホームページを構築しました。高度情報化社会の到来を迎え、東京都老人総合研究所独自に老年学、老化研究情報の収集・発信のためのシステムを整備し、データベース構築を行うことを目指して、研究成果を豊かな高齢者社会の実現のために普及・還元しています。

福祉局長賞を受賞して

疫学・福祉・政策研究グループ 菊地和則

平成6年10月に研究所に来て以来、約8年に渡って取り組んできた「ケアマネジメント研究」が、この度、福祉局職員を対象とした福祉局長賞を頂くこととなり、1月27日に都庁におきまして川崎裕康福祉局長より表彰状を頂きました。

ケアマネジメントは介護保険によって制度化されましたが、介護支援専門員の資質向上など大きな問題が残されています。今回の受賞は、日本社会福祉士会と共に研究開発を続けてきたアセスメント手法が介護支援専門員実務研修で使用されたこと、先行研究が少ない職種チーム研究に先駆的に取り組んできたこと、そして東京都が行っている介護支援専門員の資質向上の取り組みへの協力を評価して頂いたものです。

ケアマネジメント研究は実践への貢献が強く求められるものであり、これからも実践に貢献できるような研究を続けていきたいと考えています。

最後になりましたが、これまでご指導頂きました先生方、共に研究に取り組んできた現場で実践活動をしている専門職の皆様、そして研究を支えて下さった事務部門の皆様にお礼を申し上げます。



川崎福祉局長（左）から賞状を受け取る菊地研究員（右）

平成15年度科学技術週間参加行事

日 時:平成15年4月17日(木) 13:00~
場 所:養育院記念講堂
(板橋区栄町35-2)ほか

プログラム

- 13:00~ 講演(定員180名)
「ちょっと気になるもの忘れ
- 最近の痴呆予防の取り組み -」
東京都老人総合研究所 小林 充
- 15:00~ 見学(次の二つのどちらか一方)
・ポジトロン医学研究施設見学(定員40名)
・研究室見学(定員20名)

老人総合研究所 友の会 交流会

「友の会」会員を対象にした交流会です。当日の入会も歓迎します。

日 時:平成15年3月25日(火)

【講演】14:00~15:00

所 長 鈴木紘一「老人研の現状と今後」

副所長 鈴木隆雄「老人研の健康長寿を目指した取り組み

- 元気で長生きの秘訣 -」

公開講座等の予定

入場無料

第72回 老年学公開講座

テーマ:「めざせ介護予防!
健康で自立した老いの秘訣 -」

演 者:副所長 鈴木隆雄 ほか

日 時:平成15年5月31日(土)

会 場:清瀬市民センター(西武池袋線清瀬駅徒歩5分)

定 員:480名

また、詳細は未定ですが、平成15年度中にさらに3回の
老年学公開講座の開催を予定しています。

【パネル紹介、交流会など】15:15~16:00

場 所:養育院記念講堂

参加費:会員は無料

新規入会:個人年会費一口3,000円(一口以上)

法人年会費一口10,000円二口以上)

詳しくは: http://www.tmig.or.jp/J_TMIG/new/kokaikoza_yotei.html

問い合わせ先:研究調整部 研究調査担当 Tel. 03-3964-3241 内線3008

主なマスコミ報道 (H.14.12.14~H.15.2.17)

分子老化研究グループ 白澤 卓二 グループリーダー

- 「長寿と老化」考 (日本経済新聞)
 - 7 クロームは永遠の命生む?(H14.12.15)
 - 8 細胞に存在する老化時計(H14.12.22)
 - 9 遺伝子治療 分裂制御力ギ(H14.12.29)
 - 10 ホルモン補充し若返り(H15.1.5)
 - 11 活性酸素分解、老い遅らす(H15.1.12)
 - 12 線虫、寿命の解明に不可欠(H15.1.19)
 - 13 ゆっくり生きる意義は?(H15.1.26)
 - 14 心肺機能も遺伝子治療で?(H15.2.2)
 - 15 身体能力、遺伝子が左右(H15.2.9)
 - 16 多くを教えてくれる宇宙(H15.2.16)
- 心肺能力高める遺伝子変異 走っても息切れなし!
(読売新聞 H15.1.6)
- 老化研究
(Medical Tribune H15.1.2)
- 「健康寿命」延ばそう PPK(ピンピンコロリ)へ工夫と努力
(読売新聞 H15.1.14)
- スーパーマウス誕生! 変異型ヘモグロビン遺伝子でマウスが運動好きに
(日経サイエンス2003年3月号)

地域保健研究グループ 新開 省二 グループリーダー

閉じこもり予防 周囲で外出手助けを
(読売新聞 H15.1.12)

疫学・福祉・政策研究グループ 鈴木 隆雄 副所長

「お達者健診」を全国に展開
(都政新報 H15.1.17)

介護・生活基盤研究グループ 高橋 龍太郎 グループリーダー

高齢者 冬場のトラブルを防ごう
(農業共済新聞 H15.1.29)

地域保健研究グループ 熊谷 修

長寿は肉から
(東京新聞 H15.1.31)

老化レドックス制御研究グループ 金子 孝夫

撃退する「緑茶」最新薬用術
(ゆほびか 3月号)

速報

白澤卓二著「老化時計」(中公新書ラクレ)の一部が、平成15年度岐阜県立岐阜高等学校の《学校特色化選抜》入試問題文として使用されました。日本のこれからの長寿社会を考えさせる、なかなか手応えのある出題でした。

編集後記

また春が巡ってきた。身も心も軽くいざ外出しようとして「ああ、着るものがない!」と悩む時期でもある。さて、所の研究体制がグループ制に移行して2年目を迎える。ちょうど初年度の中間評価も終了したところだ。一方的に受け身の姿勢で評価「される」だけでなく、積極的に研究を進める姿勢

が大事なのであろう。これは個々の研究者や各グループだけでなく、所全体に言えることなのではないだろうか。「老人研は研究をこの方向で進めている」「老人研の存在意義はこれなんだ!」と所自ら示していく姿勢こそが望まれる。

そらみにすと



平成15年3月発行

編集・発行:(財)東京都高齢者研究・福祉振興財団 東京都老人総合研究所 広報委員会内「老人研情報」編集委員会
〒173-0015 板橋区栄町35-2 Tel. 03-3964-3241(内線3151) Fax. 03-3579-4776

印刷:株式会社 アイフィス

ホームページアドレス: http://www.tmig.or.jp/J_TMIG/J_index.html



古紙配合率70%再生紙を使用しています